

【中学校の部・優秀賞】

平和を語る贈り物

那覇市立松島中学校

二年 平良 匠

学校のベランダから聞こえる米軍戦闘機の音。日常的に行われる演習や訓練でおきる爆音も、いつもどおりの聞きなれた音になってしまっている現実。ここは沖繩。日本で唯一の地上戦が行われたところです。そんな沖繩に住んでいることもあり、学校では平和学習がよく行われます。その中でも、僕の心に強く残っている学習があります。それは、去年の夏休みに聞いた戦争体験者のお話です。

僕は昨年、「那覇・長崎少年平和と友情の翼」という交流事業の一環で、ひめゆり学徒隊生存者の話を聞く機会に恵まれました。その話は、僕の想像をこえて無惨で悲しく、恐ろしいものでした。

彼女は、ひめゆり学徒隊として病院や壕の中で負傷者の看病をしていました。しかし、外では激しさをます戦争。一向に減らない負傷者の数。その中で彼女は、「とても恐ろしいことが、現実起こっている。」と恐怖を感じたそうです。

「北へ南へたくさんガマをまわったのを覚えてるよ。他のガマへ、他のガマへとまわるたびに友達と分かれてね。一人一人と友達がなくなっていくんだよ。時々、友達のことが心配で探しまわったらね、友達の無惨な死体があったさ。もう、とつてもびっくりしてね。涙がとまらなかつたよ。」

そう話す彼女の目は、潤っていました。終戦から六十年以上の時間を経てなお、戦争のことを思い返すたびに、つらく悲しい思いがよみがえってきて、それがどれだけ彼女を苦

しめることか、そして人前で話すことがどれだけ勇気のいることかということを感じずにはいられませんでした。

彼女は、この戦争で多くの死を見てきたといえます。彼女の心の中の悲しみは、戦争が起ったときから現在まで、ずっと続いてきたのでしよう。戦争体験者全員がそうだと思います。戦争の残酷さを今も感じながら毎日を過ごしているのです。

しかし、この前僕が友達と話しているときに、友達の何気ない一言に驚きました。

「戦争とか平和とかに興味がない。」
自分の住んでいる沖繩で、戦争によって多くの尊い命がうばわれたのに、そして、現在の平和はその犠牲者の上に成り立っているはずなのに、それについて興味がないということとは、いったいどういうことなのか、その一言に僕はショックを受けました。

その後、平和学習でアブチラガマに行く機会があったので、その友達と一緒に参加しました。そのときの僕の心の中には、「友達が戦争について一つでも多く知って、平和の大切さを考えるきっかけをつくってほしい。」という思いがありました。

アブチラガマは、戦時中実際に使われていたガマで、戦争の様子を体で感じられるところです。中に入ってみると、暗くてどんよりとした空気が漂っていて、足元は滑りやすくてつねに注意を払わないといけない状態でした。ガマの中を歩き進めると、途中に「患者手当場所」という看板がありました。しかし、そこはきれいと言える場所ではなく、とても不衛生でした。こんなところでは、救える命も救えないのではないかと感じるくらいです。最後の方では持っていた懐中電灯を全員が消し、どれだけの暗さなのか体験しました。

とても暗くて、自分の手さえも見えない状態でした。戦時中にガマに避難してきた人たちはこんな暗い中で過ごしていたのかと思うと、どれほどの不便とどれほどの恐怖だったのだろうか、とやりきれない気持ちで一杯になりました。

アブチラガマを体験してきた後に、友達は

「戦争は二度と起きて欲しくないと思った。これから、平和について自分なりに考えたくなった。」

と決心した目で僕に言ってきました。友達が、平和の大切さに気づいて、とても嬉しかったです。

僕はこの体験を通し、六十年以上も前に起きた悲惨な沖繩戦を知ることにより、初めて平和をつくるためのスタートラインに立てるのだということに気づきました。それは、僕にとって平和な未来への大きな一歩を踏み出したということです。

今、僕の通っている学校の近くからは、遺骨がよく発見され、ニュースでも取り上げられています。今までは、「戦争で多くの人が本当に亡くなったんだな。」としか思わなかったけれど、平和な未来へ大きな一歩を踏み出した今では、「遺骨がでてきて、僕たちに戦争の悲惨さを教えてくれる、そして平和の大切さを教えてくれる、戦争で無惨に死んでいった人たちから僕らへの『贈り物』。」だと思っています。

僕は、その贈り物を無駄にしないように、自分ができる範囲で平和についての情報発信をしていきたいと思います。そして、一人でも多くの人が平和への関心を深めていけたらいいなと思っています。そしたらきっと、平和な未来をつくっていけると信じています。

「贈りもの、ありがとね。僕たちが平和な世界を必ずつくってみせるからね。」